

新型コロナウイルスワクチンへの期待

国立病院機構東京医療センター
副院長
樺山 幸彦

2020年4月に本誌編集委員長に就任して1年が経とうとしています。昨年も本誌には多くの原著、図説とともに、国立病院総合医学会のシンポジウムの報告には多くの演者の方に貴重な講演内容を執筆していただき、大変有難うございました。しかし昨年1月に国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されました。現在、新型コロナウイルス感染の第3波の流行に日本中がさらされ、今年1月には11都府県で緊急事態宣言が発出され、国内の感染者数は累計35万人、死者も5千人を超え、いまだ収束見込みが立たない状況の中で、ちょうどこの原稿を書いています。

国内の多くの病院では通常の医療に加え、新型コロナウイルス感染症患者の医療にも従事し、大変な1年であったと思います。特に新型コロナウイルス感染症患者の医療を直接担当している医療従事者の方は医療行為だけでなく、自身への感染予防に神経をすり減らしたと思います。病院には新型コロナウイルス感染症に罹ると重症化しやすい患者が多く入院し、医療従事者は日々感染予防に気をつけていますが、それでも院内感染の発生を防ぎきれず、今までに全国で300以上の医療機関で院内クラスターが発生しました。

日本では新型コロナウイルス感染症の死亡率は世界の他国より低く、1-2%ですが、高齢者では死亡率は高く、70歳代では5%、80歳代では12%となっています。高齢者の多い慢性期病院や高齢者向け介護施設では日本でも多くの方が新型コロナウイルス

感染症で亡くなりました。一方、インフルエンザ感染症とは異なり、無症状の新型コロナウイルス感染症患者（特に若年者）が多いことも判明し、それが家庭内感染や職場内感染を来しているとされます。

新型コロナウイルスは感染力が強だけでなく、承認された抗ウイルス薬はレムデシビルのみであるのが現状です。そのような現状で期待されるのがワクチンです。日本を含めて全世界で開発が進められ、日本ではファイザー社製mRNAワクチン、モデルナ社製mRNAワクチン、アストラゼネカ社製ウイルスベクターワクチンの3つが承認・供給予定です。いずれのワクチンも日本人でのデータに乏しいため、薬事承認後に公的機関である国立病院機構、地域医療機能推進機構、労働者健康安全機構の計100病院（うち52 NHO病院）の医療従事者2万人を対象にして先行接種が実施されることになりました。2月末に先行接種が開始されるのはファイザー社製mRNAワクチンで、今までの不活化ワクチンとは異なる新しい機序のワクチンです。国際共同第3相試験では有効率は95%とインフルエンザワクチンの有効率50-70%に対して高く、期待も大きいですが、アナフィラキシーの頻度が0.001%とインフルエンザワクチンの10倍であり、2回目接種後16%の例では発熱の副反応を認めるとされます。先行接種は日本人におけるワクチンの安全性を確認するのが目的です。東京医療センターでも先行接種を実施予定であり、発熱の副反応で少なからず1-2日休む職員がでることを想定して各部門で接種日程を分散させて行う予定です。職員に先行接種の希望調査を行いました。多くの職員が先行接種を希望されました。医療従事者の1人、NHO病院の1職員としての使命感によるものと新型コロナウイルス感染症の危険に日々曝されている危機感によるものと思います。

先行接種によって全国民接種に向けての安全性情報を提供することができ、迅速に多くの方にワクチン接種が行われ、新型コロナウイルス感染症が少しでも早期に収束することを期待しています。